

水争い

水ほど不思議で風変わりな液体はない。ミクロの世界では水分子が網の目のようにお互いが結びあつて連なり、その網目のなす立体は五角形や六角形の姿となつて絆は強い。ほかの物質と大きく異なる奇妙な世界をみせてくれる不可思議な水を大量に持つ水惑星地球の生命は水で育くまれ海には無限なほどの水がある。しかし循環する水は有限であり真水の分配は古の時代から争いが絶えない。

極地方を除いた陸地に年間の平均雨量千ミリの雨がまんべんなく降つたとすると、およそ二兆トン。日本に降る雨は〇・七兆トンで一人あたりの年総降水量は六〇三・〇トンとなつて世界の平均の五分の一ほどで豊富な水の国としては意外に少ない。オーストラリアは年降水量が三分の一だが国土の面積と人口の少なさで、一人あたりで日本の三倍で最大で、カナダ三十八倍と多い。アメリカや砂漠の国サウジアラビアです四・五倍と多く、フランスやイギリスがほぼ同じオーダーで、香港島はきわめて小さい。降る雨は蒸発し地下に浸透するのでふつう三割程度が地表を流れているが、水利用が進んでいる日本ですらその三分の一程度の九〇〇億トン程度である。まして途上国ではまだまだ水不足を招いている。

「二十世紀は水紛争が多発する時代となる。それも国家間での緊張にまで突き進むかもしれない」と警告されている。真水の分配は富める強い

国と貧しい弱い国との南北問題であり、時が進むにつれてますます深刻化してきている。中東パレスチナ問題はヨルダン川の水の分配の解決が愁眉であり、水源はレバノンとシリアにある。豊富な水が使える入植者の住宅の近くの難民キャンプでは、一杯のバケツの水すらままならない現状がある。イラクを流れるチグリス、ユーフラテス川とともに主な水源のトルコの山々にダム問題での紛争が俎上にあがり、香港島は大陸からの水に頼り死活は大陸に握られている。

アフリカサヘル地方ではサハラ砂漠の拡大南進で、西アフリカ最大の大河ニジェール川の水位の低下が進み、地下水位の低下ともかつて栄えた都市が崩壊の瀬戸際に瀕している。日本の援助で深井戸を掘っている人の話では、雨による地下水脈だけでなく、化石水と呼ばれている深い地層に溜つた水まで汲み出しているという。無論この水は一回限りで水質も悪い。そこまで水事情は悪化しているのである。

ドナウ川の流れは、ドイツ南部シュバルツバルトを源に二〇の国を流れて黒海に注いでおり、ナイル川も赤道付近の熱帯の雨を集めて、下流の数千キロの砂漠地帯を潤す大河となつて、雨の降る国と潤う国とが全く異なっている。流れに国境はないが、水の分配は国家間の微妙なバランスによる暗黙の了解で成り立っている。水不足が進むと資源の分配としての利害がからみ、ナシヨナリズム抬頭による南北問題として扱われる危険さがある。このままでは将来の水争いは必然として起こる。有効な真水は有限であり、単純にみて人口の

増加と経済活動の活発化と生活の向上につれて水需要が飛躍的に増えるのは日本をはじめ先進国で自明である。加えて砂漠化の進行や水源林の減少や地下水の組み上げによる地下水位の低下など等さらにすでに始まっている地球の温暖化によって降雨域の移動になかなか対応できずに分配の格差がますます増えることになる。

それぞれ国のなかでも水の分配に争いがつきものである。一昨年の危機的な水不足の際には、吉野川の水の分配で香川県が深刻な給水制限に追い込まれ、隣の県は制限なしという格差となり、佐世保では市の南部と北部で水道の給水制限に大差がでてしまつて南北問題と騒がれた。さらに水需要の変化に追いつかず、都市用水と農業用水の分配が水利権という怪物によって水不足に大きな偏りがでている。

上流にはダムの適地は少なくなり水の調達コストの増大が進み、都市が上流にだけ水を求める時代は過ぎたと言える。東京都での年間総降水量はおよそ二億トンと、使う水道の量およそ二〇億より多いが、そのほとんどが利用されずに下水に流れ去っている。その雨水を地下に貯めて中水として使っている両国国技館や東京ドームなどの試みや、雨水浸透ますで湧き水の上流で地中に戻して湧き水を保ち「ホタルの里」を守る試みもされているが、都市の水利用はまだ僅かである。水を治めることが「政まつりこと」の源。分配の偏りからくる紛争が果ては国家間の争いに発展することすら予想される水の恨みは、そう単純に水に流すことがないだろう。いまや「水利用と有効

な水を増やす」ことでは先進国である日本が、水を
治める仕事で世界へ貢献する出番なのではなから
うか。